

精神欠陥学研究グループの現況

丸 井 文 男

昭和43年11月に、「精神欠陥学」講座が正式に開設され、私が担当することになったが、この講座は、おそらく、まだ、全国の大学でも唯一のものである。その内容は、異常心理学、精神病理学に基盤をおくが、精神衛生学や、臨床心理学とも極めて密接な関連のある領域で、われわれとしては、既存の学問名にとらわれなく、ひろく人間を対象とする正常者から、種々の異常状態をもつ人間の広汎な分野に亘り、新しいジャンルを開拓するつもりである。

発足以来、日も浅いが、最近1年間における研究グループの研究分野とその内容や成果の一部について概述する。

1. 所謂“自閉症”の治療教育の方法に関する研究

これは、昭和44年2月以来、今日までに、計20名以上の自閉症児とその親を対象として実施してきている。

従来、われわれは、当学部の教育臨床施設の来談者の情緒障害児を中心に心理治療を行ってきたが、自閉症について、集中的に研究をすすめることにして、(1) 臨床専攻希望の大学院生を中心にしての臨床技術の研修、(2) 自閉症及びその周辺症候群及び情緒障害の成因の探究、(3) 自閉症児の親のパーソナリティ及び、その治療方法、ことに母親のカウンセリングによる対子供関係の改善及びその成果の把握などを目標にしてきている。われわれの自閉症グループには、所謂 **Autistic child** と称される境界疾患群から、マラーの **Symbiotic infantile psychosis** とされる特殊な小児精神病まで含まれている。

自閉症の治療方法は、現在、多様なものがあり、原理的には、ほぼ見解は一致しているが、具体的方法には、まだ定式化したものがないが、われわれの **man-to-man** 方式による集団的個人遊戯療法の成果は、可成りみとめられると考えられる。(参加者 丸井、蔭山英順助手、永田忠夫助手、大学院生及び大学院研究生 11名)

2. 自閉症の治療過程の分析と、それによる診断基準の再検討

上記の臨床的な経験による方法の検討とともに、従来自閉症の診断は、特有な症候群の有無にもとづいて行なわれてきており、必ずしも、治療的経過との関連は明らかになっていない。われわれは、治療による症状の変化によって、自閉症児の自我構造の精神病理学的解明をすすめながら、この結果にもとづいて、診断の基準を再検討することを意図している。現在、80回以上に亘って、継続治療が行われ、いちじるしい変化をとげている事

例もあり、これらは、将来、別途に報告する予定であるが、一方、長期に亘る治療的努力にもかかわらず、治療的变化の乏しい事例もあるので、今後、更に継続する予定である。(参加者 丸井、蔭山英順助手、永田忠夫助手、大学院生及び大学院研究生 11名)

3. 精神健康的人格 (**Mental Healthy Personality**) に関する理論的、臨床的研究

Fromm, E., Maslow, A. その他の **Mental Healthy Personality** についての理論の検討を相互に比較しながら行なうとともに、**Herzberg, F.** の精神健康度の測定理論とその方法を参考にして、学生集団、及び職場集団(現在2ヶ所を対象にしている)の特徴を把握するとともに、個人の精神状況を、**Motivation factor** と **Hygiene factor** から、把えることを目的としている。方法としては、新たにグループで考案している **M-H・TAT** と **S. C. T** 及び質問紙調査の資料を総合して診断し、精神的不健康度によって、指導法を確立することを試みている。(参加者 丸井、蔭山英順助手、大学院生2名)

4. 大学生の適応異常に関する研究

これは、数年前からの継続研究であり、「留年増加」現象の要因の分析を京都大学、広島大学、九州大学のスタッフと協同で行なってきたものの一環である。われわれは、昭和40年ごろから増加した留年現象のなかで、もっとも注目すべきは、大学の大衆化にともない、無目的の大学入学者の増加及び、現代青年の人格的特徴を背景とする“意欲減退症候群”とわれわれが呼称している一群の学生群である。これは昭和46年度も継続される科学研究費の総合研究の一部門として参加している。(参加者 丸井、蔭山英順助手)

5. 発作性意識障害を訴え、反社会的事件を惹起した一青年の精神病理学的考察

この事例は、昭和45年8月に、某近県で発生した某警察官傷害事件の18才の少年である。今後の精密な精神鑑定と、治療を委託されたもので、某精神病院に入院させており、諸々の問題点を解明することを継続中である。なお、この事例は、昭和44年8月に、今回と類似した、本人のいう意識障害状態で、数日間、山中を徘徊した直後、当教室に来訪、一回だけであるが、若干のテストなどを行っているので、これらの経過を含め追跡することになっているが、種々の稀有の現象像の発現と、特殊な人格的特性が問題点の一つと考えている。これもいづれ近い将来、報告しようと思う。(参加者丸井、大学院生1名)